

ひらつか

広報 2018 7 月
No.1106 第1金曜日号

金魚を愛でる

折り重なるように並んだいけすの中を、渦を巻いて泳ぐ金魚の群れ。実は全て描かれたものです。金魚をモチーフに創作を続ける美術作家、深堀隆介の作品200点以上を集めた展覧会を開きます。

目次

- 1～3面…**特集** 金魚絵師の世界…生きているかのような金魚を樹脂の中に描く美術作家、深堀隆介さんの展覧会を紹介します。
- 4～7面…募集・スポーツ・お知らせ・健康と福祉「みんなの力」「ひらつか名産品リレー」
- 8面…ヒラツカルチャー「MOTTO図書館」

平塚市の人口と世帯数

<平成30年6月1日現在()内は前月比>

人口 258,008人…(-58)
世帯数 110,697世帯…(+93)



金魚絵師の世界

透明な樹脂にアクリル絵の具で金魚を描く独特の技法で注目を集めている現代美術作家、深堀隆介。美術館で作家の魅力に触れませんか。

問 美術館 ☎35-2111



神秘的な美しさを表現する

なぜ金魚を描き続けるのですか？ そう深堀さんに問いかけると「きつかけは、あの『金魚救い』しかありません」と答えが返ってきます。

作家を救った1匹の金魚

深堀さんが金魚救いと呼ぶ出来事は、18年前、作家として活動を始めて間もない頃に起こりました。当時、創作活動に行き詰まりを感じていた深堀さん。「作品を作るたびに作風が変わり、いろいろな答えを探していた時期です」と振り返ります。抱いていた意気込みは失速し、芸術の世界で生きていく厳しさや、後悔を感じ始めていました。

もう絵を描くのをやめようと思ったある日、7年間飼っていた金魚に目が留まりました。「日頃、全然気にしていなかった存在なのに、何となく水槽のふたを開けてみただけです。普段は横から見ている金魚を上から見た瞬間、美しさ、そして妖しい魅力に一気に心をつかまれました」。

う前に、最後にこの金魚を描こうと筆を走らせた深堀さん。「僕の筆の動きに合わせて金魚が生まれるのが楽しくて、絵を描くことの意味に気付きました」と当時を思い出します。金魚に『救われた』という体験が転機となり、金魚を描き始めます。

独自の作風を追い求める

描き始めた当初は、壁などに金魚と影を描いて、どこにでも泳ぐ金魚という作品を売りにしていました。しかし、深堀さんは「常に自分だけの技法、誰にもできない、どこでも教えていない技法を探していました。数多い美術家中で、僕だけの技法があれば生き抜いていけると思ったからです」と話します。

そこで平成14年、かつて働いていた工房での経験を生かし、樹脂を使った技法を編み出します。最初は樹脂の中に切り抜いた絵を入れて固めていました。確かに金魚が水中にいたように見えましたが、斬新とまではいきませんが、



金魚酒 命名 美宙
平成26年 個人蔵

でした。そんな時、型に残っていた樹脂が固まっているのを見て、そこにじかに絵を描こうと思いつきます。

「実験だと思って1匹描いてみました。その上に樹脂を流し込み、一晩置いてみると、絵が溶けて消えることもなく、きれいに固まっていたんです。自分の絵に命が宿ったような不思議な感覚に襲われました。同時にこれまで見たことがなく、面白い表現だと感じたんです。透明な樹脂に描くことで、金魚のひれの優雅な動きや、内側が透けて見えるような薄い皮膚の質感が再現されます。

終わることない試行錯誤

翌年に作品を発表すると大きな反響がありました。「これだ」と感触をつかみましたね。木や紙などの自然素材が好きだったので、石油由来の樹脂は真逆の素材。でも、樹脂の作品のおかげで多くの人に知ってもらえました。今も昔も、名作といわれる作品を作る人は新しいことをやっていますから、挑戦が必要、

何層にも重ねて描く

深堀さんの作品はどのように作り出されているのでしょうか。升の中に愛らしい金魚が泳ぐ代表作、「金魚酒」(上写真)を例に、制作の工程をのぞいてみましょう。



▲樹脂を流し込む作業は、まるで理科の実験のような雰囲気が進められます



1 最初に升到樹脂を流し込みます。作品に使う樹脂は低温だと気泡ができてしまうため、25度程度の室温に保ちます。



2 流し込んだ樹脂は固まるまで2日ほどかかります。樹脂の上にアクリル絵の具で金魚の体の一部を描きます。



3 上から樹脂を流し込み、次の層に描いていきます。2と3の工程を繰り返します。層の数は作品により異なります。



4 制作にかかる期間は2カ月以上。平面の層を重ね、立体的な金魚を生み出します。

7月7日(土)~9月2日(日)

金魚絵師 深堀隆介展 平成しんちう屋

900円、高校生・大学生500円。午前9時30分~午後5時(入場は4時30まで)。8月4日(土)~19日(日)は午後6時まで開館時間を延長します(入場は5時30分まで)。毎週月曜日休館。7月16日(祝)は開館し、17日(火)が休館。

①~⑤は作家が講師を務めます。

① ライブペインティング

7月7日午後2時~2時30分(予定)。テーマホール。

② 講演会

7月21日(土)午後2時~3時30分。ミュージアムホール。150人(当日先着順)。

③ 公開制作

7月29日(日)午後2時~5時(予定)。展示室。観覧券が必要です。

④ ワークショップ ジェルキャンドルに金魚を泳がせよう!

8月11日(祝)午前10時~午後1時。アトリエ。小・中学生と保護者10組20人(抽選)。800円。

■ ワークショップ名・実施日・郵便番号・住所・氏名(ふりがな)・電話番号・年齢を、はがき・メールで、7月5日(木)~26日(木)に、〒254-0073西八幡1-3-3美術館☎35-2111 art-muse@city.hiratsuka.kanagawa.jpへ。メールはタイトルに「ワークショップ名・実施日」を記載してください。

⑤ 作品解説ツアー

8月11日午後2時~2時40分。展示室。観覧券が必要です。

⑥ みんなで選ぼうお気に入りの作品! ひらつか子ども審査員賞

中学生以下の方。

投票期間 7月7日~8月9日(木)。

結果発表 8月14日(火)~9月2日。

図書館・博物館も一緒に楽しもう

3館コラボ 美術館・図書館・博物館 折り紙ラリー! 3種類の魚の折り紙を集めましょう。7月7日(土)~8月28日(火)。

中央図書館 ☎31-0415

企画展示 8月30日(木)まで。
赤・RED 赤い魚と赤い星と赤い本 貸出室。
あかとほしとさかなの本 こども室。

博物館 ☎33-5111

“赤”の科学展 赤い天体や鉱物、生き物などを紹介します。7月21日(土)~9月9日(日)。情報コーナー。

体験学習 情報コーナー前。
▶分光器を作ろう 人工的に虹をつくることのできる道具を工作します。8月2日(木)午後1時~1時50分。

▶赤い宝石を探し出そう 火山灰の中からガーネットを探して、標本を作ります。8月16日(木)午後1時~1時50分。

▶魚が浮いたり沈んだり 浮沈子を作ろう 9月9日午後1時30分~3時30分。



樹脂作品のほかに、絵画も展示します

「白澄ー空密」平成26年 個人蔵

江戸の金魚屋を現代に再現

展覧会のタイトル「しんちう屋」は、江戸時代に東京の上野にあった大きな金魚屋「真鍮屋」から名付けられました。

浮世草子や人形浄瑠璃の作家として知られる井原西鶴が書いた「西鶴置土産」という作品に登場し、70~80個もの金魚のいけすが庭に並んでいたといわれています。

自らの手で、さまざまな金魚を生み出す深堀さんの展覧会にぴったりの名前です。

作家の過去から未来へ

今回の展覧会は、深堀さんにとって公立美術館で初めての本格的な企画展。「これまで作ってきた未発表の作品も展示します。鑑賞しながら、どうやって今の金魚にたどり着いたのかを時系列で知っていただける内容です」と意欲を見せます。金魚以外の魚をモチーフにした作品なども紹介

し、表現がどのように進化したのかをたどります。
「美術館に『金魚屋さん』が、そして目玉が、「平成しんちう屋」と名付けたインスタレーション作品。インスタレーションとは、空間全体を作品にする表現方法です。「大学生の時以来のインス

タレーション作品です。平塚の企画を考えるときに、担当の方に「自由に表現してください」と言ってもらえました。そこで、自分はどういう作家なのかと改めて考えたときに、美術家というよりも「絵の金魚屋さん」の方が当てはまると思ったんです」と話す深堀さん。「金魚を作っている

養殖場の雰囲気や作品で表現したいと考えました。
イメージを打ち壊したい息をのむようなリアリティや細かさが代名詞の深堀さんの作品でも、今回はそんなイメージを壊したいと思っています」と意気込む深堀さん。「実は漫画のような作

品も描いているし、民芸品の木彫りの熊に彩色したような面白い作品もあるんですよ」と笑顔で続けます。「何より自分は、人を笑わせるのが好きなんです。しかも、かめつ面や作品と向き合うような美術の世界にいます。自分も硬くなりがち。でも、作品を見た人が笑顔で喜んでくれるのを見ると、素直にうれしいですから」。楽しく、無理せず、もっと自分を出していきたいと今回の展覧会への思いを口にする深堀さんは、同時に「もし、うまくいかなかったらと考えられるものすごく不安です」と心境を話します。



インスタレーションの構想を描いたスケッチ。金魚が泳ぐ「カンコ」と呼ばれる木製の箱がいくつも並んでいます。奥には屋台風の建物も見えます

「若い頃は独り善がりになってしまいうこともありますが、今は「みんなが驚くだろうな」といったずらを仕掛ける子どもにも戻ったような感覚で作っています。子どもからお年寄りまで、多くの人に楽しんでもらいたいです」と力を込めます。

同時開催 夏の所蔵品展 ●いきもの図鑑



小関利雄「蛙の五月祭」昭和61年

金魚がモチーフの深堀隆介展にちなんで、生き物を描いた作品約50点を紹介します。

200円、高校生・大学生100円。

学芸員によるギャラリートーク

7月15日(日)午後2時~2時30分。展示室。観覧券が必要です。



作品となる器は、陶器やビニール袋などさまざま。「金魚が泳いでいる姿を器の中に見いだせれば、捨てられていた茶わんなども作品にしますよ」と深堀さんは話します